

飛 騰

平成7年10月
第15号



海 援 隊 旗

二つの展示から

高知県立坂本龍馬記念館

館長 小 椋 克 己

6歳から92歳までという幅広い年齢、宮城県から沖縄県までという広いエリアからの応募を頂いて「坂本龍馬イメージ画展」はおかげさまで親子連れの方々と賑わいました。昨年水不足などで落ち込んでいただけに、最高一日1,736人、八月合計2万4千人の数字は嬉しく映りました。

ところで、寄せられた539点の、変化に富んだイメージ画の中で龍馬が何を持っているのかについて、調べてみました。

一番多いのが、抜き身の刀で36、次いでピストル18、竹刀も18でした。つまり作品の1割が即実戦の武器なのです。

龍馬の手紙などによりますと、ピストルは寺田屋での難を逃れるため実用し、薩摩旅行では

お龍と鳥を撃って楽しんでいますが、刀を実際に抜いて戦ったことはないと思われ、最期を遂げる近江屋でさえ、鞘をはらう間もなくそのまま相手の刀を受け、致命傷となっています。

もっとも、寺田屋の難で逃げる時、裏の家の中を通り抜けるため、その家の建具を同志の三好慎蔵と「兩人して刀を以てさんざんに切破り足にて踏破りなどした」と書いていますが、勿論、この相手は「人」ではありません。

龍馬の「行動力」「強さ」「切り拓く」などのイメージが「抜き身の刀」となったのかも知れませんが、やはり龍馬は「感性」「発想」「美学」の人でしょう。

龍馬を正しく理解するのに、彼の手紙は参考になります。下の写真の「龍馬の手紙を読んでみませんか」展は好評で、細かい字の読み下し文や訳文を、じっくり読んで下さっています。

慶應3年6月24日乙女宛ての手紙の長さが、4メートルを超えることを私も初めて知りました。



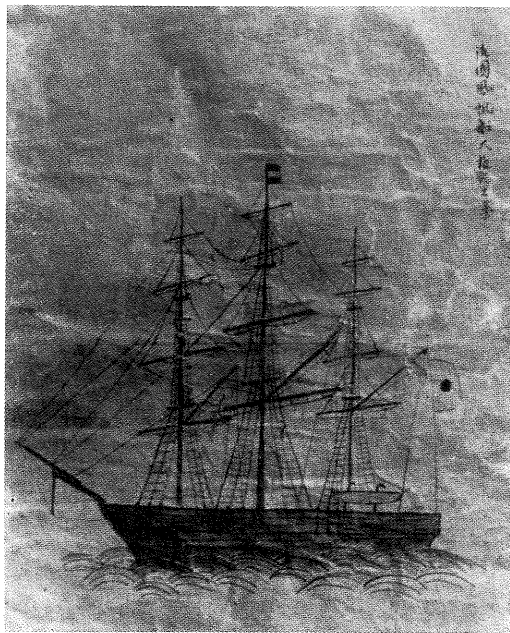
秋の企画展 龍馬の夢 蝦夷地開拓展

「異国（人）の首打取り帰国可仕候」と龍馬が父権平に書面を送ったのは、黒船を目にした嘉永六年九月二十三日であった。開国の影響は大きく国内の対外危機意識は高まり、経済は混乱し、それは反幕の機運を急激に高めた。尊王攘夷、公武合体の対立にとどまらず、外国との衝突もあいつぎ多くの若い命を失う事態ともなっていた。

文久三（一八六三）年五月二日、越前敦賀から北海道めざして船出した土佐勤王の志士がいた。北添佶磨、能勢達太郎、小松小太郎、安岡斧太郎ら四人であった。ロシア船の日本近海出沒による北方侵攻の危機感が、彼らを蝦夷地にやったであろう。佶磨らは、函館から中富江そして江差へ、さらに南部・仙台藩の視察も終えて江戸に帰ったのは七月八日であった。江戸では重太郎の紹介で勝海舟にも北方での見聞を大いに語った。龍馬と二人の出会いもこの時か、あるいは京都にいた元治元年（一八六四）五月と考えられ、彼等の「北地の談」が龍馬の北方への夢の萌芽となった。蝦夷地の防衛そして開拓と貿易は、「海外ノ志アル者」（海援隊約規）に通じる。

元治元年六月、この構想はもう実現されようとしていた。六月のはじめ龍馬は黒龍丸で江戸に向かった。一方勝海舟は幕府船長崎丸で上京していたが故障で下田に寄港した。龍馬は下田に勝海舟を訪ねた。これは京都や大阪に潜伏して過激な行動をめざす志士のエネルギーを、北

方蝦夷地につきこむべく幕府の黒龍丸を利用して移送する計画があったからである。過激志士への弾圧は日ごと厳しさを増し、龍馬はこれら同志をその危機から救う必要に迫られていた。しかし計画は池田屋騒動と禁門の変が砕いた。いずれも尊攘派の勢力挽回をさせた過激な行動の結末であった。池田屋騒動で北添佶磨と蝦



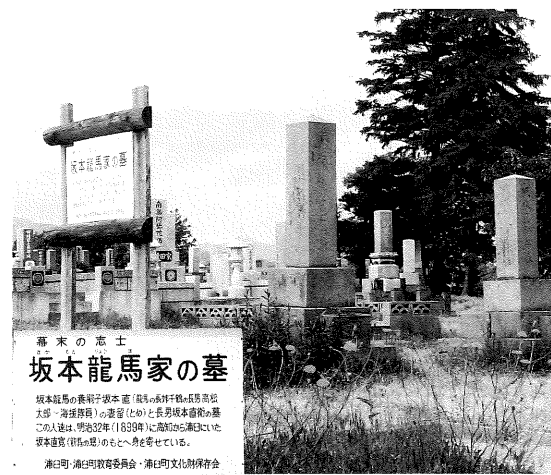
平尾道雄著『海援隊始末記』より

夷地移住を楽しみにしていた望月亀弥太を失い、能勢達太郎は禁門の変で敗れ自刃した。すでに小松小太郎は病で倒れ、安岡斧太郎は大和天誅組に加わり斬首となっており、ここに蝦夷地視察のすべての人材を失なった。

池田屋騒動や禁門の変、神戸海軍操練所の廃止とあわただしい時勢の中で、龍馬は薩摩に接近し亀山社中を組織し活動を開始した。北方移住についても、鳥羽藩士河田佐久馬へ慶応三年三月十四日、また慶応三年三月六日長府藩士印藤肇などへは「一人でなりともやり付」と北方への熱い思いがみなぎる書面を送っている。また「北行きの船」の準備も万端で、「いろは丸」と名づけ土佐海援隊長として海運業と蝦夷地行

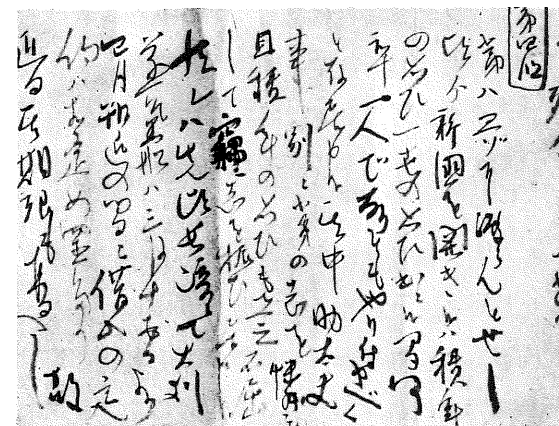
きも考えていた。しかし「いろは丸」は四月二十三日、紀州軍艦「明光丸」と衝突し龍馬の夢も、船もともに備中宇治島沖の波間に消えた。

龍馬は慶応二年十月、「大極丸」を購入した。蝦夷地行きを考えての購入であったが、購入にまつわる悶着がその実現を妨げた。周旋人高松太郎が計画していた借用予定の一万両の話がまとまらず、船価一万二千ドル支払のめどもたたないまま、慶應三年四月亀山社中は土佐藩に属し海援隊と改められた。「大極丸」も後藤象二郎が引き受け土佐が買い取りこれを蝦夷地移住に利用することは困難となった。「いろは丸」の遭難、「大極丸」の悶着と計画の中断を余儀なくされた龍馬は、「大極丸」へ乗り込む予定であった林謙三に「思ふニ唯君のミならず、久年積学、もふ此頃ハ船一ツも、私より御渡し可申ハ当然の所なるを、御存の通の次第、ここに於ては私シ汗顔の次第なり。されば此の大極丸の一条ヘチャモクレ、御一身おもしろくなしとくれバ海援隊の名ハ身をよする所なれば持ておるがよろし。それとも幕へでも、薩へでも唯君をよろこび、君又天下に海軍を以てちからをの



べたまふ所へ御出も、又御同意ニ候」（慶應三年十一月十日）と計画実現の不調を悔やみつつ、目的達成の方法があればと執着する。

第三次の計画が龍馬の胸にあったことは十一月十一日の林謙三への書簡に見るように「そが中ニも蝦夷の一条は別して兼而存込の事故、元より御同意仕候。」と龍馬は最後まで「蝦夷の一条は特別に御同意」と若い命が国内戦で消えるのを惜しみ、蝦夷地に送り将来の海軍に役立つ者の養成が急務であるとし、その考えは当時薩摩海軍に勤務する林謙三も了解の上での計画であったようである。しかし四日後龍馬自身が



『坂本龍馬全集』より

命を奪われた。「北海道ですか、アレはずっと前から海援隊で開拓すると言っていました。私も行くつもりで北海道の言葉をいちいち手帳へ書きつけて毎日稽古して居りました」（『千里駒後日譚』）と後日語ったお龍の言葉にも龍馬の蝦夷地への情熱がうかがえる。

龍馬の蝦夷地への夢はその実現を見ずに終わったが、土佐には龍馬を継いだ男たちがいた。かって龍馬と神戸塾や海援隊として活躍した龍馬の甥高松太郎は、明治維新後函館府権判事となり、府知事に蝦夷地開拓の建白書を提出し龍馬の意志を継いだ。また、坂本直寛や沢本楠弥は北見に、武市安哉や前田駒次らは浦臼にと次々にその夢を結実させていった。

『10月23日～12月25日 開催』

坂本龍馬おりょう新婚の旅

高知市観光課 岡林 一彦

“その先の龍馬おりょうの足音を

追いかけてゆく高千穂の峰”

一慶応2年3月29日、龍馬はおりょうの手をひき霧島温泉を出発、高千穂の峰へむかった。一

8月23日、私たちは龍馬ゆかりの霧島ホテル（旧霧島館）を後に念願であった二人の足跡を訪ねることになった。

萩の小さな蕾が風にさわぎ、高原の秋の始まりを感じさせる。

正午前、高千穂河原より、私たち一行は大きな鳥居をくぐり山頂をめざし登りはじめる。

先導してくれるのは、鹿児島歩こう会の会長、霧島ホテルの総支配人と、まことにうれしく、たのしい同行者である。

登りのとっつきはきつく、樹々の影のなか、休み休みの歩みとなる。その合間、ひょっこりと若い鹿が顔を見せてくれる。幸先のよい予感となる。

林をぬけるとガラゴロと黒や赤茶の火山石がすべる荒れた山肌の道が続く。

龍馬の手紙で「やけ土さら—少しなきそうになる」場所である。

幸いにも夏の太陽が照りつけてこないのありがたかった。

目の前の峰へようやく登りつめたと思ったら、そこはまだお鉢火口のふちであった。

火口を見れば目がくらみ、硫黄の刺激臭が強く鼻をさす。

龍馬も「すり鉢の如く下お見るニお

そろしきよふなり」と記している。

この頃から霧がかかり始めてくる。お鉢の尾根“馬の背”をおそるおそる体をかがめ、声をとろしての前進となる。

龍馬がおりょうの手を引き渡った“馬のせごへ”である。

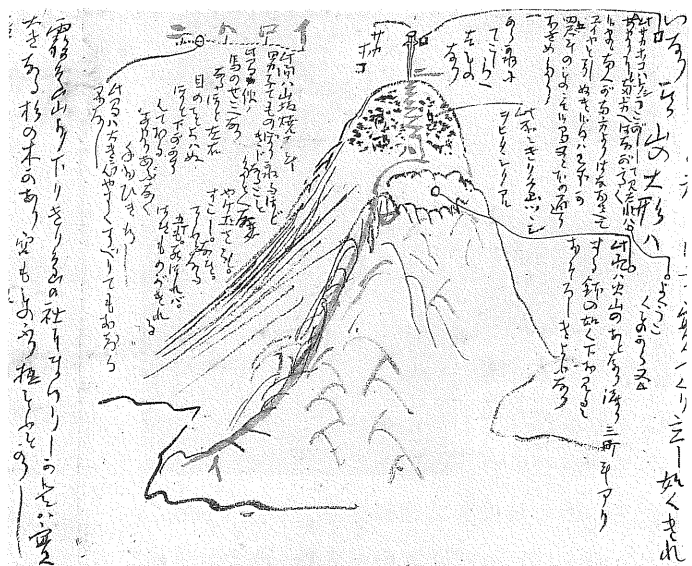
霧はあたり一面をつつみ、冷たい雨が前方を阻む。体が冷え、空腹が体力気力を萎えさせる。

少し平らになっている場所で弁当をあける。

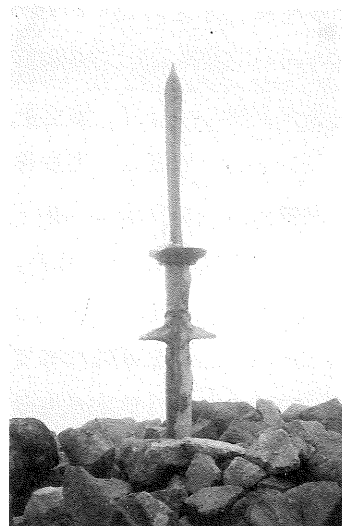
塩シャケとおにぎり、そして缶ビールで勇気をつけ、歩こう会の会長に励まされ、ためらいをふりきり重い腰をあげた。

濃いガスのなか、見えない山頂をめざし、気力をふりしぼっての出発となる。

また、きついガラガラの道が続き、こまかい砂に足もとられる。張り出してくる大きな岩の出現に何とか通れるすき間をさがして、両手も



坂本龍馬書簡 慶応2年12月4日 坂本乙女あて



天の逆鉾

馬のふるさと高知より持参の酒を捧げ乾杯。

そして、どうしてもしたかった龍馬の真似、天の逆鉾をゆすってみる。

しかし、ぬけるどころか、びくともしない。突き出た3本の剣のようなものがゆれるだけだ。

誰かさんのせいで頑丈にしたのかも知れない。129年前、龍馬おりょうはこの地に立ち、澄みきった空の下、遠く眼下にかすむ風景をながめ大いに笑い、どんな夢を語りあったであろう。

その記念すべき日は1866年5月13日である。霧島の花ミヤマキリシマが時を盛りにそのかれんな花をおびたたく咲かせ、二人の新婚の旅を祝福する。ピンクの花はかわいい花かんざしになり、おりょうの髪にゆれる。

山頂で、記念となるいろいろと形や色に特徴ある石を持ち帰り下山することとした。

上りは、ゆっくりと景色を楽しむことなく、必死だったが、はるか霧島連峰にうかぶ新燃岳や韓国岳の美しさに心は軽くなってくる。

桜島や錦江湾に加え、開聞岳も遠くに見え、地元の方の説明に新鮮な感動をおぼえ、うれしく降りてくる。

16時、登山口である高千穂河原へ降り着く。

使いながら黙々とよじ登っていく。

やっとガスのかなたに鳥居と天の逆鉾がかすんで見えてくる。

13時55分、ようやく1574m高千穂の峰へ到着。

息を休めることなく、早速龍

往復4時間の充実した時が流れた。

その夜、霧島ホテルの硫黄谷温泉のあおく透きとおった湯に手足を伸ばし、疲れをいやす。

龍馬おりょうもつかった温泉である。ホテル前庭には2人の湯治記念の石碑が建っている。

当時をしのび、温泉水焼酎のピッチもあがり二人の新婚の旅に想いを馳せ、話はつきない。

その深夜、桜島は3年ぶりに爆発噴火、火柱があがった。

坂本龍馬おりょうの新婚旅行の道を訪ねる旅。鹿児島島の天保山公園の新婚の旅の像、塩浸温泉の新婚湯治の像、和気清麻呂が庵むすびし所

蔭見の滝、霧島神宮等ゆかりの地をめぐることができた。地元の方々の熱い想いで龍馬おりょうがそれぞれの地に息づいており、うれしく龍馬のふるさとへ帰ることができた。

とりわけ、高千穂の峰は当時の自然がそのまま残されており、その道々に二人の息吹が感じられ、その感動を龍馬たちと共有できる喜びがある。

“それぞれに想いふれあう瞬間ありて薩摩ことばも忘れぬ旅”



坂本龍馬お龍新婚湯治碑（牧園町 塩浸温泉）

東奔西走のうちに、僅か33歳の生涯を終えた龍馬は、数多くの手紙を書き、現在136通が残されています。これらの手紙の殆どは、龍馬が文久2年28歳で脱藩してから暗殺されるまでの6年間で最も活躍した時期と重なりますが、これだけ多くの手紙が残されたことは、龍馬を愛惜する人がいかに多かったかを物語るとともに、幕末動乱の生きた証拠であり、また龍馬研究上貴重な資料であります。また、龍馬研究者から書簡文の傑作と評価されています。

この中で、龍馬を母親代りに育てたと伝えられる姉乙女にあてたものが16通と最も多く、かな交りの平易な文章で自慢し或いは甘え、赤裸々に己をさらけ出していて、特に興味をそそられます。この乙女あて手紙の楽しさを入館者に味わっていただきたいと、コピーした手紙に並べて読み下し文と更には解説を付し、展示しました。

展示の素材は、本県出身作家宮地佐一郎氏の「坂本龍馬全集全一卷」と「龍馬の手紙」で、手紙の写真と読み下し文は、そのまま利用させていただきました。

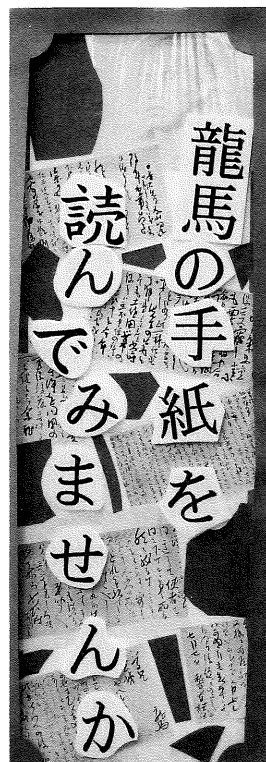
スペースの関係で16通の中から次の7通にしぼりました。なお、当館に展示してあるものは除きました。

文久3年5月17日付け乙女あての手紙は、「エヘン顔」の手紙で有名ですが、海舟の弟子となり、かねて希望していた海軍の稽古や学問をしていること、更に自分の才能を海舟に認められたことを自慢しています。

文久3年6月28日付け乙女あての手紙は、時勢を見る目を誤らず、世の動きを見て全力投球

せよと「ねぶと論」を展開しています。

文久3年8月14日の乙女宛の手紙は、龍馬が入門した千葉道場の長女佐那について、細やかに、具体的に紹介しています。佐那は一生独身を通し、龍馬と婚約関係にあったと伝えられていますが、この話を裏付けるようなこの手紙が、昭和60年に初公開されました。



文久3年秋頃の乙女と春猪にあてた手紙は、吉村虎太郎の挙兵の失敗を嘆き、自分が指揮をとれば成功したものと自負しています。慶応元年9月9日の乙女とおやべにあてた手紙の後半では、妻お龍を愛情細やかに紹介し、乙女姉さんに気に入ってもらおうと一生懸命で姉の機嫌をとってしまいます。

慶応2年12月4日の乙女宛手紙では、妻お龍との蜜月旅行を天真爛漫にのろけています。

慶応3年6月24日の乙女とおやべにあてた手紙では、可愛がってきた姪春猪の夫（養子）に失望し、出奔したいと言う姉には迷惑顔も出しています。また、妻お龍を語りながら女性観も伺われて興味は尽きません。

さて、作業に取りかかり、本の写真を拡大コピーし、つなぎ合わせてみますと曲ったり、思いがけず長いものになり、特に慶応3年6月24日付けの手紙は、4メートルを超えるものになり、今更ながら龍馬の筆まめなのに感心させられました。

「龍馬がゆく」を書いた司馬遼太郎氏は、龍馬の手紙に「精神の肉声」を感じると言っていますが、皆様はどうお感じになりましたでしょうか。

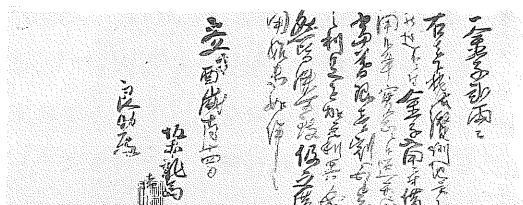
新資料の紹介

龍馬の借用証文（複製）

文久元年10月、龍馬は武市半平太の親書を持って長州の久坂玄瑞を訪ねる旅に出た。途中、城下北部の柴巻村で龍馬と親交のあった田中良助の家に寄り2両の借用をした。

文久2年2月土佐に帰るが、玄瑞の刺激を受け、文久3年3月脱藩した。

こうしたあわただしい身辺にあってこの2両は返還されなかったものと思われる。



武市瑞山の書簡（複製）

瑞山は文久元年土佐勤王党を組織し、その党首となり、土佐藩参政吉田東洋を中心とする公武合体派と対立した。

東洋暗殺により勢力を得た瑞山は、藩論を尊皇攘夷に統一しようとするが、失敗し、文久3年9月投獄された。

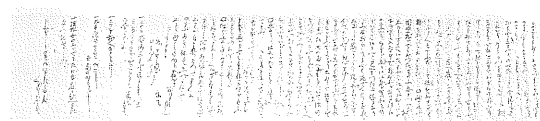
瑞山の獄中生活は約1年8か月続いたが、慶応元年閏5月11日切腹を命ぜられ、37歳の生涯を閉じた。

この間得意の筆で自画像や獄中の有様を絵入の文に残し、妻や姉に殆ど毎日のように消息を伝えている。

この3通の手紙は、妻及び姉に宛たもので、岡田以蔵の裏切りにも及んでいる。

繊細で几帳面な字体から、龍馬とは対照的な性格も伺えて興味深い。

妻とみ宛



妻とみ・姉奈美宛



姉奈美宛

公文菊僊画 武市瑞山・中岡慎太郎肖像画

日本画家、名は時衛。明治6年高知城下に生まれた。明治25年高知尋常中学校卒業後東京に出て久保田米僊に四条派を学んだ。勤王家の肖像を好んで描き、特に龍馬の肖像画が多い。



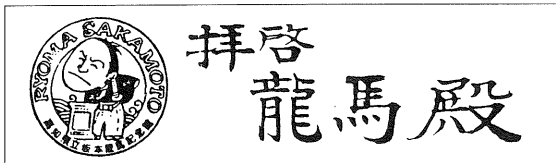
武市瑞山肖像画



中岡慎太郎肖像画

入館状況

平成7・9・26現在（開館以来1398日）	
○総入館者数	548,771人
○最多入館 平成5・5・3	3,700人
○最少入館 " 6・9・29（台風）	23人
○本年度最多入館 " 7・5・4	2,618人
○本年度最少入館 " 7・6・21	84人
○本年度1日平均入館者数	392人



拜啓 龍馬殿

● 現在私は長州は山口で教育の修行をしています。来年はきっと土佐の高知で小学校の教師としてがんばっていることでしょう。私は龍馬殿のように柔軟な思考をもっている、そしてなによりも人間性豊かな人間を育てることを誓います。

そして21世紀をむかえ、私自身時代のみえる人間になりたいと思っています。もしまちがった方にこの日本が傾いたときは、私が変わるべき、龍馬殿、安心しちよってや。

(8月9日 山口県 H・Y 男性)

● 貴方にほれて会いたくて会いたくてまた来ました。昨夜は貴方の愛した桂浜で眠りました。

自分は25年間生きてきてまだまだ小さな人間でしかなく、少しでも貴方の様な大きな大きな心を持つ男になりたいと改めて思っていますが、まだまだ修業が必要だと月の下で痛感しました。

私には限られた時間しかなく、なかなか貴方に会いに来れないのが残念ですが、機会を見つけて何度でも会いに来ます。その度に少しずつでも大きく成長出来た私をお見せしたいと思います。

(8月18日 兵庫県 M・K 男性)

● 龍馬館の建物がすごくおしゃれで感激しました。

何年ぶりかの桂浜の海は、とてもきれいで、心が落ちつききました。また来ます。

(8月21日 和歌山県 A・H 女性)

● ちょうど卒論のテーマを決めなければいけない頃、私は龍馬と二度目の出逢いをしました。一度目は中学の社会で出逢い、大学に入って友

人にすすめられた「おーい、龍馬」で二度目となるのですが、一度目と違い、それはとても強い力で私をとりこにしました。

卒論はまようことなく「龍馬」に決定し、先生の反対をおしきりもう4年の夏となり、今更ながら先生の反対された理由がのみこめました。龍馬あなたは大きすぎます。

ともかく一度決めたことだから、あなたを見習って途中で投げることなく書き終えてみせます。見守っててください。

はじめて来たこの地は、あなたが生まれた事があったりまえのように海は海、山は山と豪快でとても気に入りました。

(8月29日 兵庫県 M・H 女性)

● 「藩」という枠や「家」という因習にしばられ志を遂げることの出来なかった多くの幕末志士たちの中で、あなたは唯一人「日本人」というひとまわり大きな立場にめざめ諸外国の圧力につぶされることなく維新を達成することができた。我々の時代はもはや「日本人」の枠はとりはられ「地球人」となるべき時であると思う。国家や民族の差異をのりこえ、我々が地球のために最善と思うことを為すべきだと感じた。あなたの現実と理想をうまく調和させ、機熟した時に疾風のごとく事をすすめるやり方をぜひ学びとりたい。

(9月5日 東京都 A・R 男性)

館だより “飛騰” 第15号

平成7年(1995)10月1日発行

発行所 高知県立坂本龍馬記念館

〒781-02 高知市浦戸城山830

TEL (0888) 41-0001

FAX (0888) 41-0015